

英国病理学会参加報告

国立がん研究センター研究所 細胞情報学分野
高阪 真路

このたび、日本病理学会の日英交流事業の一環として、英国病理学会(Unleashing the edge power of pathology: Jan. 31- Feb. 2, 2023)に参加させていただきました。新型コロナウイルスの全世界的なパンデミックの遷延にて、約3年ぶりの現地開催の学会となったこともあり、参加者は皆さん大変嬉しそうな表情を浮かべ、どのセッションも活発な議論がなされました。

講演はシングルセル解析から人工知能を用いた computational pathology まで、従来の病理学とは異なる、新たな分野と融合した複合的な病理学に関する最先端の研究発表の連続でした。特に初日最初のシンポジウムからサンガー研究所の名だたる研究者が続々と登場し、最新の技術を用いたシングルセル解析、空間トランスクリプトーム解析に関する発表がされたことには圧倒され、英国の底力を感じました。

また、2日目には Society dinner に招待いただき、夕食を共にしながら、お互いの研究について紹介し意見を交わしつつ、懇親を深める場を楽しみました。Prof. Heike のスピーチが何分になるかを皆さんで賭けるという伝統行事?にも参加させていただき、大変盛り上がりしました。

3日目には自身の口頭発表の機会をいただき、日本のがんゲノム医療の紹介と FFPE 検体を用いた RNA-seq の有用性について発表いたしました。発表後には仲良くなった UCL (University College London)の研究者から Genomics England のがんコホートの進捗について情報共有していただき、英国の場合は臨床実装に課題があるとのことを伺いました。

大変嬉しいことに、私の発表は2位に選出され、祝福をいただきました。私は英語を苦手としていましたが、丁寧にスライドを作成して、分かりやすくプレゼンすることを心掛けたのが良かったようで、自信にもつながりました。

このような国際的な学会に参加させて頂いたことは大変貴重な経験であり、最新の研究の潮流や医療の状況を活きた情報として収集できたことも、現地開催ならではの大きな収穫であり、自身の研究の方向性に関しても再確認もすることができました。

このような貴重な機会を与えて下さりました日英両国の病理学会の関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。



学会場近くの Bond Street はロンドン中心部に位置するブランド店街であり、多くの観光客で賑わっていました。